


海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	松金 良祐 
所属機関	国立がん研究センター研究所 分子薬理研究分野
<ul style="list-style-type: none"> ・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	American society of Clinical Pharmacology and Therapeutics, Annual meeting 2018, Orlando, Florida (ASCPT 2018)
渡航期間	自 20 MARCH, 2018 至 26 MARCH, 2018
<ul style="list-style-type: none"> ・研究内容 ・国際学会・会議内容 	ASCPT2018 において、ポスター演題を 1 題と、Biologics, Biomarkers & Translational Tools Community session において口頭発表を 1 題おこなった。
<p>ASCPT2018 において、ポスター演題を 1 題と、Biologics, Biomarkers & Translational Tools Community session において口頭発表を 1 題おこなった。どちらの発表も演題名は”Intra-tumor analysis of trastuzumab distribution by PID staining, breakthrough method with high visuality and single cell quantification”である。</p> <p>ポスター発表では、今回新規開発した抗体医薬の組織分布を可視化、定量化するための PID imaging に対して非常に興味を持っていただき、その方法論について活発なディスカッションを行うことができた。特に、本方法を利用した imaging PK analysis については新期のコンセプトであり、実験結果に関しても妥当であるという意見をえることができた。</p> <p>口頭発表においては、本法の感受性や特異性に関する質問や heterogeneous な腫瘍内分布を示す抗体医薬に対して、それに影響を与える因子はどのようなものかという質問が挙げられた。</p> <p>ポスターセッションの多くが臨床データに基づいた PK、メトリクス解析によるものであった。中には抗体医薬の腫瘍内移行についてモデリングシュミレーションをしている演題もあり、発表者とディスカッションできた点が良かった。</p> <p>健康成人を用いた抗がん剤薬開発のセッションにおいては、現在増え続ける治験に対して、患者の取り合いが行われている現状への対策についてのディスカッションが行われた。分子標的薬や immunotherapy において、副作用が低く、バイオアベイラビリティや薬物動態を調べることに良いが、健康成人から生検組織を採取するのはハードルが高いことが挙げられた。健康成人を用いる場合は豊富できれいなデータが得られ、かつ患者登録に時間を要さないため薬事承認までの期間を短くすることができ、dose escalating, single dose safety, tolerability, PK study などには健康成人が用いられた実績がある。しかし、治験に参加できる健康成人が満たさなければならない条件として、年齢や健康状態のみならず、金銭的な欲求がないこと、社会貢献の意思があること、単独の治験しか参加しないことなどが挙げられており、安全性のみならず、健康成人を集めるという点においても、課題も多く残っているということであった。(800)</p>	